

ピースボート2000南回り地球一周の旅から

著者	尾形 憲
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	68
号	3・4
ページ	239-266
発行年	2001-03-28
URL	http://hdl.handle.net/10114/1167

【研究ノート】

ピースボート 2000 南回り 地球一周の旅から

尾 形 憲

1

大学を退職してからもう7年近くになる。経済学部スタッフもだいぶ入れかわったようだが、まずは不名誉教授の退職後の近況報告からはじめよう。

余生いくばくもないが、私は大学を辞めたときこれからの仕事として二つのことを思い定めた。学歴社会の撲滅と平和運動である。

大学では長らくこの大学にもないと思われる「教育経済論」という勝手な講義をやっていた。大学が学びの場でなく、就職予備校、大卒パスポート授与場になりさがり、人間のためであるはずの教育が経済のために人材、人的資源を育成し、選別する手段となっているという観点から教育の諸問題を見てみようというものである。学歴社会をぶっつぶすことなしには、本当の学びの場の復権はありえない。

平和運動だが、1983年に映画と講演による市民講座「法政平和大学」を私の主宰で始めてから、すぐさま学んだことは、平和というのは単に戦争がないというだけではなく、戦争を生み出す原因となっているさまざまな差別・抑圧、飢餓・貧困、環境破壊などをなくさなければ、本当の平和はやってこないし、また戦争はこうしたものを集中的に生み出すものである以上、これらの問題も含めた“積極的平和”として考えねばならないこ

と、だった。してみれば、教育問題も、性差別、部落差別、障害者差別などと同様、学歴差別として、広義の平和問題の一環としてとらえねばならない。以来ゼミでも、単に教育問題に止まらず、第3世界、ミナマタ、さまざまな差別問題など、取り組むテーマは広がる一方となった。だが、現象面ではまったく異なるように見えても、つきつめてゆくと、その根源はすべて同一であることにあらためて気づかされた。

大学を辞めたとたん、今までまったく無縁と思っていた政治の世界に引っぱりこまれた。護憲勢力を打って一丸としようという「道しるべ構想委員会」である。そして、この年の4月から8月まで後述のピースボートで海外に出かけ、ほとんど運動にタッチできなかったのに、10月にこの「構想委員会」が発展した「新党民主フォーラム」では、その共同代表、それも重大な責任をもつ財務委員長にされてしまったのである。

この「フォーラム」は故岩井章、田英夫、上田哲など、旧日本社会党の変節に愛想を尽かして離党した人々とともに、95年2月には「護憲のための連帯」を結成した。前記3氏を代表とし、部落解放同盟の小森龍邦さんを筆頭代表としてである。4月の統一地方選、7月の参議院選に護憲統一勢力で取り組もうという構えだった。ところが、東京都知事候補についての意見の対立について、当時の村山政権の支持、不支持という重大な問題で、決定的な亀裂が生まれた。私たちはあれだけの裏切りをやらかした村山政権を絶対支持できないとして、これを容認する田さんたちの「平和・市民」と袂を別ち、「憲法みどり農の連帯」の旗を掲げることになる。そして参議院選では、私がなんと4期24年の実績をもつ田さんの向こうを張って、東京地方区から立候補というとんでもないことになってしまった。

もちろんのこと、みごと落選、以来引き続き、「連帯」の共同代表として、とくに最近では沖縄問題にかかわり続けている。ここ3年あまり、沖縄通いは15回、今年の6月18日から7月25日にかけては、沖縄サミットに向け、キャラバンカーで「基地ノー、ヘルプ・ジュゴン」、普天間基地の県内移設絶対反対を訴えて、東京―横須賀―浜松―名古屋―京都―大阪―

西宮―岡山―広島―岩国―山口―下関―北九州―福岡―長崎―（博多からフェリー）那覇―名護と 3000 余 km を走りまわった。7 月 20 日には、嘉手納基地包囲の人間の鎖に加わり、2 万 7100 人（実際は 3 万人以上？）の 1 人になれたのだと、30 数日の炎天下のキャラバンの疲れが吹きとぶ思いの誇らしさを感じた。

話がだいぶ遡るが、1982 年は全世界的に反核のうねりが昂揚した年で、日本でも各地で反核の大集会が開かれた。法政でも、全教員の 2/3 以上が賛同し、職員や学生にもよびかけて独自の反核集会が開かれ、400 人教室が超満員となった。さまざまな主義主張をこえて、全国でもはじめての「非核大学宣言」がここで採択されたのである。

私はこの集会の世話役の西田勝さんや柚井林二郎さんに「非核大学宣言」の具体化として平和問題の市民講座を法政でやったらどうかと相談を持ちかけた。こうして翌 83 年の 5 月から、講演と映画による市民講座「法政平和大学」が始められたわけである。各学部から 1 人ずつ世話人をお願いしたが、言い出しっぺということで、私が世話人代表ということになった。

5 月から 12 月まで、月 1 回の土曜日午後だが、直接受講できない遠隔地の人たちや仕事の都合で来られない人たちのため、講演のテープをおこした講義録を送る「通信教育」も行なった。マスコミが大々的に取り上げたこともあって、全国的にすさまじい反響を呼び起こし、私が退職するすぐ前の 92 年度までの 10 年間、月例の 80 回、番外講座 7 回、連続講座 11 回、合宿 6 回、この間の講師は 108 人で、受講者はのべ 3 万 4000 人に及んだ。

その詳細については、オリジン出版センター刊『法政平和大学十年のあゆみ』を見て頂きたいが、これが私の平和運動への本格的な取り組みとなった。

法政平和大学が発足した 83 年の 9 月、若者たちが主催する「ピースボート」がスタートし、西田勝さんと私が早速「洋上平和大学」の講師として招かれた。以来 17 年、私はずっとこのピースボートにかかわり続けている。

そんなわけで、大学退職のとき決意した仕事の一つである“学歴社会撲滅”はほとんど足が遠のいてしまったが、平和運動の方は「連帯」、ピースボート、「日本戦没学生記念会」(「わだつみ会」)、「日中友好元軍人の会」、「平和遺族会」、「自主・平和・民主のための広範な国民連合」、それに昨年発足した共産主義社会の実現をめざす「共産主義協議会・未来」(コム・未来)などにさまざまな形でかかわっている。私が第Ⅰ期の主宰者をおりてからあと、93年から第Ⅱ期として石谷行さん、栃木利夫さんなどではじめられた法政平和大学も、ときどき顔を出させてもらっている。

2

近況報告が長くなったが、本論のピースボートの話に入ろう。82年は“教科書問題”の年だった。中学や高校の教科書でアジア諸国への日本の“侵略”を“進出”と書きかえろと文部省が文句をつけ、韓国や中国からすさまじい非難を受けた。当然のことである。このころ早稲田大学の学生だった現衆議院議員辻元清美さんたちは、自分たちが学んで(学ばされて)きた歴史はいったい何だったのか、自分の目で現実を見てみよう、ということで、ピースボートを出すことにした。「過去の戦争を見つめ、未来の平和を創る」というキャッチフレーズで、日本が侵略した国々を回ろうというのである。そういうわけで、はじめはアジアと太平洋の国々だけだったが、90～91年からは世界一周もするようになり、今日まで別表のような31回にも及ぶクルーズを重ねている。

この間、前述のように、私は初回「洋上平和大学」の講師として招かれ、それから、授業があるときサボって乗るわけにはいかないから毎回とまではゆかないが、そのほぼ2/3、20回あまりに講師(後では水先案内人)、主催者(後では責任パートナー)、団長、先遣団長、船の契約者や保証人など、さまざまな形でかかわり続けてきた。その模様については、本誌第62巻第3・4合併号(1995.3)に「ピースボート'94 世界一周の旅から」

別 表

回	期 間	航 路	参加者 (人)	使 用 船 (トン)
1	'83. 9. 2～ 9. 14	横浜→小笠原→硫黄島(通過)→グアム →サイパン(ロタ島, テニアン島)→東京・晴海	159	にっぽん丸 (船籍: 日本) 9,745
2	'84. 9. 2～ 9. 17	横浜→石垣島→上海(南京, 杭州, 蘇州) →香港→東京・晴海	394	"
3	'85. 8. 27～ 9. 15	神戸→マニラ(ミンダナオ島, レイテ島) →ホーチミン(ハノイ, フェ, プノンペン) →沖縄→神戸	457	コーラルプリンセス(英) 10,000
4	'86. 8. 19～ 9. 5	広島→パラオ→マニラ→(ネグロス島, ミンダナオ島)→基隆(台北, 霧社, 花蓮, 高雄)→長崎	545	"
5	'87. 8. 28～ 9. 18	名古屋→東マレーシア・コタキナバル→ シンガポール(ジョホールバル(マレーシア)) →ホーチミン(フェ, ビンロン, プノンペン)→沖縄→広島	599	さんふらわあ7 (日本) 8,000
6	北 '88. 8. 18～ 8. 26	新潟→ナホトカ→ハバロフスク→(空路) サハリン→(空路)ハバロフスク→(空路) 新潟	196	ネジダノーバ (ソ連) 3,000
	南 '88. 8. 29～ 9. 19	名古屋→天津(北京, ハルビン, 長春, 瀋陽, 撫順, 敦煌)→大連→上海→南京 →香港(マカオ)→沖縄→石垣島→博多	486	さんふらわあ7
7	'89. 3. 30～ 4. 8	東京→日立(東海, 福島)→八戸(関根 浜, 六ヶ所, 三沢)→青森→金沢→敦賀 →唐津(祝島)→宇和島(伊方)→大阪	520	"
8	'89. 8. 6～ 8. 17	広島(大久野島, 江田島)→長崎→済州 島→仁川(ソウル, 扶余, 天安, 江華島) →広島	259	コーラルプリンセス
9	'89. 12. 2～ 12. 14	東京→(空路)バンコク→海南島・三亚→ ホーチミン(クーチ, ビンロン, プノン ペン, アンコールワット)→コンボンソム →バンコク→(空路)東京	337	オーシャンパール (バハマ) 12,000
10	'90. 11. 1～ '91. 1. 29	ギリシア→マルタ→チュニジア→スベ イン→モロッコ→ポルトガル→バハマ→ キューバ→パナマ運河→ニカラグア→メ キシコ→ホノルル→広島→長崎→上海 →マニラ→ホーチミン→シンガポール→コ ロンボ→ボンベイ→アデン→スエズ運河 →キプロス→ギリシア	760	オセアノス (ギリシア) 14,000
11	'91. 9. 17～ 9. 27	新潟→サハリン→エトロフ→シコタン→ クナシリ→釧路	120	ネジダノーバ (ロシア) 3,000
12	'91. 10. 18～ 11. 2	博多→釜山→仁川(ソウル, 天安, 板門 店)→金沢→(陸路)新潟→元山→ビ ョンヤン(板門店, 開城, 金剛山)→元山 →新潟	260	オリガサドフスカ ヤ(ロシア) 3,000 サムチョン (北朝鮮) 8,000
13	'92. 4. 20～ 5. 9	長崎→香港→コンボンソム(プノンペン, アンコールワット)→ホーチミン(ビン ロン, クーチ)→マニラ→福岡	350	ルーシー (ロシア) 12,897
14	'92. 12. 25～ '93. 1. 13	シンガポール→ホーチミン(ビンロン, クーチ)→シアヌークビル(プノンペン, タケオ, アンコールワット)→ブルネイ →東マレーシア→ジャカルタ(バリ, ボ ルブドゥール)→シンガポール	362	コーラプリンセス (香港) 10,000

別 表 (つづき)

回	期 間	航 路	参加者 (人)	使 用 船 (トン)
15	'93. 10. 7～ 10. 12	東京→屋久島→宿毛(四万十川)→名古屋(長良川)	343	新さくら丸 (日本) 17,400
16	'94. 4. 28～ 7. 20 6. 9～ 8. 31	東京→石垣島→香港→ダナン→シンガポール(マレーシア)→コロンボ→ケニア→ジブチ→スエズ運河→エジプト→ギリシア→シシリー→チュニジア→ポルトガル→ニューヨーク→パナマ運河→ホノルル→東京	1,398	新さくら丸 ゴールデン・オデッセイ(パナマ) 10,500
17	'95. 6. 3～ 6. 26	東京→トラック→ガダルカナル→ラバウル→パラオ→沖縄→神戸→東京	410	カレリヤ (ウクライナ) 15,065
18	'95. 6. 27～ 10. 17	東京→上海→ダナン→シンガポール→コロンボ→スエズ運河(カイロ)→イスラエル→クロアチア→マルセイユ→モロッコ→セネガル→ブラジル→ベネズエラ→キューバ→パナマ運河→エルサルバドル→メキシコ→バンクーバー→東京	450	カレリヤ
19	'96. 8. 8～ 8. 18	新潟→元山→ピョンヤン(板門店, 開城, 金剛山)→元山→新潟	248	万景峰 92 朝鮮民主主義人民 共和国定期船
20	'96. 12. 18～ '97. 3. 20	シンガポール→バリ→オーストラリア→ニューカレドニア→タヒチ→イースター→ペルー→パナマ運河→ジャマイカ→キューバ→パナマ→カナリア諸島→モロッコ→ローマ→アテネ→イスラエル→ポートサイド→スエズ運河→エリトリア→インド→シンガポール	555	アワニ・ドリーム (パナマ) 11,724
21	'97. 7. 26～ 8. 17	東京→香港→ダナン→マニラ→パラオ→那覇→神戸	441	ミハイル・ショー ロフ(ロシア)
22	'98. 2. 26～ 3. 19	横浜→廈門→ダナン→カンボジア→ブルネイ→フィリピン→神戸	454	新さくら丸
23	'98. 6. 17～ 6. 21	大阪→沖縄	200	飛龍
24	'98. 10. 19～ '99. 1. 12	リバプール→ハバナ→メキシコ→エクアドル→タヒチ→フィジー→ダーウィン→バリ→シンガポール→印度→エリトリア→カイロ→ユーゴ→イタリア→バルセロナ→モロッコ→サザンプトン	841	オリビア (ウクライナ) 15,791
25	'99. 1. 19～ 4. 16	東京→廈門→ダナン→シンガポール→セイシェル→モンバサ→ザンジバル→モザンビーク→ケープタウン→リオデジャネイロ→ヴェノスアイレス→プンタアレナス(マゼラン海峡)→バルパライソ(チリ)→イースター→タヒチ→フィジー→ラバウル→グアム→東京	476	新さくら丸 19,811
26	'99. 10. 18～ 2000. 1. 15	東京→香港→ダナン→シンガポール→コロンボ→エリトリア→ポートサイド→イスラエル→アテネ→ユーゴ→イタリア→カナリア諸島→ハバナ→アカプルコ(メキシコ)→タヒチ→フィジー→チューク→東京	640	オリビア

別 表 (つづき)

回	期 間	航 路	参加者 (人)	使 用 船 (トン)
27	'00. 1. 16～ 4. 14	東京→基隆→ダナン→シンガポール→セイシェル→モンバサ→マダガスカル→ケープタウン→リオデジャネイロ→ヴェノスアイレス→プンタアレナス→バルパライソ→イースター→タヒチ→フィジー→ラバウル→チューク→東京	653	オリビア
28	'00. 5. 22～ 8. 21	東京→香港→ダナン→シンガポール→コロombo→セイシェル→モンバサ→エリトリア→ポートサイド→イスラエル→ギリシア→ユーゴ→イタリア→カナリア諸島→ハバナ→アカプルコ→バンクーバー→東京	769	オリビア
29	①'00. 8. 22～ 8. 29 ②'00. 9. 6～ 9. 13	新潟→元山(平壤)→新潟	①203 ② 74	万景峰 92
30	'00. 8. 31～ 10. 14	神戸→フィリピン→バリ→ダーウィン→ブリスベン→オークランド→ニューカレドニア→ガダルカナル→ラバウル→チューク→東京	486	オリビア
31	'00. 10. 15～ '01. 1. 15	東京→基隆→ダナン→インド→エリトリア→スエズ運河→エジプト→イスラエル/パレスチナ→クロアチア→イタリア→スペイン→カナリア諸島→キューバ→パナマ運河→ペルー→イースター→タヒチ→フィジー→チューク→東京	498	オリビア
32	'01. 1. 16～ 4. 18	東京→基隆→ダナン→シンガポール→セイシェル→ケープタウン→ナミビア→リオデジャネイロ→ヴェノスアイレス→プンタアレナス→バルパライソ→イースター→タヒチ→フィジー→ラバウル→チューク→東京		オリビア

と題する報告を書いており、また『わが平和への船旅・ピースボート——南十字と安保・沖縄——』と題する本を第3書館から97年3月に出している(経済学部両資料室、多摩・市ヶ谷・小金井各図書館所蔵)、それをもら頂きたい。

船上での平和講座の講師は、石川文洋、本多勝一、筑紫哲也、石坂啓、橋本勝、井川一久、伊藤千尋、手塚治虫、保坂展人、加納実紀代、宇井純、鶴見良行、西川潤、伊藤ルイ、灰谷健次郎、前田哲男、牧野剛、見田宗介、小田実、鎌田慧、松井やより、神田香織、寺井一通、原一男、浅田彰、高木仁三郎、西尾漠、松下竜一、石川好、沢地久枝、西野瑠美子、田中優、河辺一郎、立松和平、長倉洋海、広河隆一、C. オーバービーなど、各方

面にわたり、豪華な顔ぶれである。こうした人々による講座のほか、若者たちを中心とした企画にふさわしく、水上運動会、ディスコ、仮装舞踏会、盆踊り、将棋大会、参加者の自主企画など、盛り沢山のイベントが準備される。

もちろん、これらに参加するもしないも各人の自由である。一日ポケッと海を眺めていたり、小さなプールで泳いで甲羅干ししたり、寝ていたり、夜はデッキで恋を語ったり（「ピースボート」ならぬ「ピンクボート」、「ラブホテル」と週刊誌に取り上げられたことがある）、他人の迷惑にならなければどうでもかまわない。星空の下のデッキやバーで飲み明かすこともできる。船旅のいいところはあらためて家へ帰る必要のないことで、前記のようなふだんはTVなどでしかお目にかかれなような人たちと膝を交えて飲みながら語りあうこともできるのである。船上で知りあつてのゴールインや、「洋上結婚式」ももう何組になるかしら。

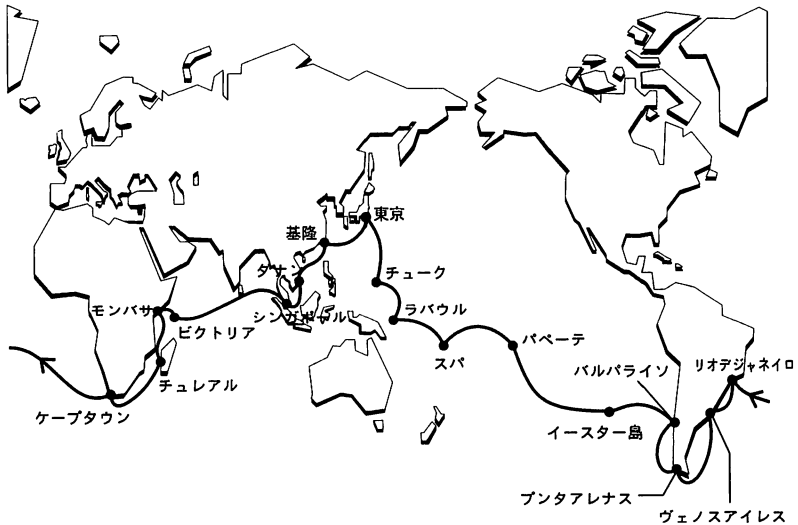
私はいつも教育、環境、戦争体験、平和、とくに沖縄の問題などについて講座を開いているが、そのほか毎回すっかり恒例化し、人気番組となった星の話をしている。アッパーデッキで満天の文字通り降るような星を眺めながら、星座を教え、ギリシア神話をはじめとする神話や民話を語る。憧れの南十字とよくだまされるニセ十字の見分けかたも話す。船室に帰ると、「あの星の光のエネルギーは核融合反応のエネルギーで…」ととたんに量子力学、相対性理論などお堅い物理の話になる。

さて、そのピースボートに乗るための費用だが、世界一周、だいたい3ヵ月でざっと100万円、1日1万円で3食（プラス2回のティーと夜食）、泊っているいろんなイベントに参加して（映画は毎日4〜5回!）である。方々の大学へ行ってビラ配りやポスター貼り、あるいは事務局での電話当番などのアルバイトは時給1000円、一日フルにやると1万円だから100日で参加費がでてくるとあって、結構毎回若い人たちの参加が多い。学生の皆さん、授業をサボり、ピースボートのバイトをして、クルーズに参加しませんか？

3

いよいよ本番のピースボートの報告になる。第 27 回、2000 年 1 月 16 日から 4 月 14 日までの南回り地球一周である。私の世界一周は前回本誌に書いた 94 年からはじまり、4 回目になる。東京—基隆—ダナン—シンガポール—セイシェル—モンバサー—マダガスカル—ケープタウン—リオデジャネイロ—ヴェノスアイレス—プンタアレナス（マゼラン海峡）—バルパライソ—イースター—タヒチ—フィジー—ラバウル—チューク（トラック）—東京という別図のようなコース、14 ヶ国 16 寄港地の旅である。スエズ運河やパナマ運河はこれまで何度も通っているのに、昨年に続き、めったに行けない南回りにした。昨年は新さくら丸という日本船籍の船だったが、日本船籍の船でマゼラン海峡を通ったのは、戦後はじめてということだった。

今回の船はウクライナ船籍のオリビア、1 万 5791 トンの船である。こ



別図 南回り地球一周クルーズ航程

の船は旧名をカレリヤといった。5年前の南太平洋クルーズにはじめて使ったが、チャーターの交渉のバック・アップのため私がロンドンまで行かされ、そして船賃の支払いに私が保証人となった船である。この年は船賃はちゃんと払ったので、私にツケは回ってこなかったが、7000万円の赤字を出し、40人の責任パートナー1人あたり170万円の負担となった。100万、50万、5万と3段階の責任パートナーの出資によって、寄港先のイベントの下ごしらえなどの立ち上がり資金にするが、出資といっても利子がつくわけでもない。黒字になれば、返ってくるが、赤字になれば、さらに負担ということになる。自分たちで決定し、実行し、責任をとる。いわばパリ・コンミュン方式である。

さて、オリビアが東京・晴海を出港したのは1月だからダウンウエアを着こんでの冬仕度である。だが、2、3日すれば、もう船上でも上陸地でも、短パン、Tシャツ姿になる。それが地球の裏側のマゼラン海峡前後はまた冬仕度に逆戻り、向うは夏なのに何しろ南緯55度、昔の樺太の国境線より緯度が高いのだ。それを過ぎると、また夏仕度。チュークを過ぎるあたりまでそんな恰好ですむ。

今回の参加者は653人、うち晴海からが620人で、その8割がピースボートは初めてということだが、もう何回もという顔なじみ、いわゆるリピーターもかなりおり、とくに年配の夫婦づれが多い。年代別では30代以下が48%、なかの20代以下が33%と1/3を占め、60代以上は35%となっている。

今回は27回目のクルーズということになっているが、このうち船を2隻出したことが3回あり、都合30隻のうち私は21隻に乗っている。何しろ83年のスタート以来からのつきあいだから、ぬしみたいなのである。

たとえばベトナムではフェコース、ヴィンモック地下トンネルコース、近くの農村コース、ホーチミンコースなど、各寄港地ごといくつかのオプションツアーが組まれているが、もちろんどれにも参加しない自由行動でもかまわない。ただ場所によっては治安が悪く、単独行動で金品を強奪

されたりしたケースもあるのでご用心のこと。

寄港地の一々について書いていたら、きりがないので、目ばしいものについてだけ報告する。はじめはダナン。

私のベトナム訪問はこれが12回目になる（その割にはちっともベトナム語を覚ええないのだが……）。昨年はじめてダナンの「希望の村」(Village of Hope)という孤児院を訪ね、職員や子どもたちと交流した。そこで私はファム・ティ・チャム・イエンちゃんという15歳の女の子と知りあいになった。彼女の父は家を捨てて逃げてしまい、母は再婚したが、貧困のため彼女を叔父のところに預けた。その叔父も経済的に苦しく、孤児院に引受けを依頼し、彼女は前年の8月からここで暮らすようになったという。孤児でなくともこういうケースが多いのだそう。私は日本に帰ってから、彼女と撮った写真や富士山とか桜といった日本の絵葉書を同封した手紙を送った。それに対して、彼女の返事と一緒に院長さんから孤児院の概況の報告と彼女の里親になってくれとの依頼が届いた。何と、1人の子どもを1年間住まわせ、食事を与え、教育し、職業訓練するなどの面倒をみるのに、里親の負担はわずか300ドルという。私は早速速達で4万円を送金して里親になった。

今回のベトナム訪問は前以て手紙で知らせてある。ダナンで下船して私は自由行動で、シクロ（人力自転車）で孤児院を訪ねた。ちょうど土曜日の午後で、彼女は大喜びで私を迎えてくれ、院長さんにも会った。私の怪しい英語を通訳してくれたのはアンさんである。彼女は今高校2年で、コンピューターの勉強をしているという。

いろいろ話しているところへ、ピースボートの市内観光のグループがここを訪ねてきて、子どもたちと交流した。彼らが船に帰っていったあと、私は院長さんに今年の分としての300ドルにカンパを50ドル加えて差し上げ、イエンちゃん、アンさんと近くのレストランで食事をした。このあと夜、ダナン青年連盟主催のフェスティバルがあり、その会場まで2人は私についてきて、名残を惜しんで別れた。孤児院で案内してもらった彼女

の部屋には、彼女のほか 11 のベッドがあり、私はたとえばアフリカでは象、キリン、縞馬、ペンギンなどを撮った写真を 12 枚（+アンさん分 1 枚）ずつ帰国後送る旨、ケープタウンからの絵葉書で彼女に知らせてやった。

2001 年の 1 月からまた南回り世界一周クルーズが予定されているので、私はこれに乗ることにしている。先ごろ院長さんから 9 月新学年度が孤児 150 人、聾児 50 人ではじまったことの挨拶があった。それで私は 1 月に訪ねたとき、私がつくったピースボート 17 年のスライド、たとえば枯葉剤の犠牲になった無脳症や二重体のホルマリン漬けの胎児たち、カンボジアではポルポトに虐殺された人たちの頭蓋骨の山やアンコールワット、エジプトのピラミッドやスフィンクス、アフリカの動物たち、マゼラン海峡の氷河など約 80 枚を子どもたちに見せたいがと返事してやった。フェにもこのピースボートで同行した小山達夫さんが創った「子どもの家」があり、そこでも見せられる機会があればと思っている。

ベトナムで子どもたちと仲よしになる一つの方法はジャンケンである。「石」が「金槌」になるだけで、ルールは一切同じである。物珍しそうに寄ってくる子どもたちにジャンケンをしかけると、はじめは人見知りして尻ごみしているが、そのうち乗ってくると止めなくなる。インドネシアでは親指が象、人差指が人間、小指が蟻で、人間は象には負けるが蟻に勝ち、蟻は人間に負けるが象に勝つ。これは耳の穴にでも入られたら象はお手上げということだろう。アフリカや中南米にはジャンケンはないが、教えてやると大喜びでやるようになる。

1990 年の湾岸戦争の際、ピースボートのなかに UPA (United Peoples' Alliance: 国際民衆連合) という集まりができた。以来 UPA は船の中で水先案内人や乗りこんだ各国の平和活動家の講演やパネルディスカッションを企画したり、95 年の戦後 50 年の声明で日本政府がモタモタしているとき、ピースボート独自の声明を出そうと、大江志乃夫さんや私などと深夜まで検討したりした。また例年日本各地で集めた足踏みミシン、医薬品、

学用品などを船の輸送力を利用して各地に送り届けることもやっているが、この年のベトナムでも、ダナン青年連盟に毛布 350 枚、自転車 22 台、衣類などを送った。「子どもの家」を支える会」にも 146 箱の物資を届けた。また旧正月に暖かい食事を食べてもらおうと日本で募金して、3500 ドルで 1000 羽の鶏を購入し、ベトナムの 4 つの農村に届けている。

シンガポールまではこの時節はいつもそうなのか（去年もだった）曇りの日が多く、ほんとうは沖縄を過ぎたあたりから見えるはずの南十字星がここを過ぎてからやっと見えるようになった。ただし、まだ眠い日の出前である。それでも、朝 5 時に「南十字星を見る集い」をアッパーデッキでやったら、100 数十人が集まって私の説明に熱心に耳を傾けた。このころは夜明け前だが、だんだん出るのが早くなり、太平洋にかかるころは前半夜に見られるようになるし、南へ行けば行くほど高くなって見やすくなり、見える時間も長くなる。よくだまされるのは、そのずっと右側、全天で二番目に明るい星カノープスの左にある「ニセ十字」である。この方が一まわり大きく、よく間違えられる。晴れてさえいれば、チュークあたりまで毎晩見られるわけである。

シンガポールを出てインド洋はまる 8 日、途中地球温暖化がこのまま続けば水没してしまうというモルジブの傍を通った。

モンバサでは私たちは「私は象牙を買わない」(NO NO IVORY) の PR を街頭でやった。ケニア在住 28 年という獣医^{かんべ}神戸俊平さんの話によると、アフリカの象牙の 6 割は日本に輸入されていたし、その 7 割がハンコになったという。1970 年代から 80 年代にかけ、象は 130 万頭から 70 万頭に激減したので、89 年に象牙の取引は一切禁止になった。ところが昨年(1)の 2 月、「ワシントン条約」により、ナミビア、ボツアナ、ジンバブエの 3 国が約 60 トンの象牙を日本にだけ輸出してよいということになった。だが、輸入象牙は自然死した象からではなく、生きた象の群れを襲う密猟によるものが多いという。昨年私たちは横断幕を持って市内をデモったが(写真 1)、今年は実物大の象の絵に“NO NO IVORY”と書いた大きなポスター



写真1 NO NO IVORY

を路傍に広げ、ビラ配りや署名活動を行なった。

この翌日はツァボ国立公園である。天井の開いたサファリカーから見る縞馬、キリン、象などの群れを童心に帰った思いで見た。

ケープタウンではバスで喜望峰へ、さらにケーブルへ乗り継いでのケープポイントの展望台では、右がこれから渡る大西洋、左がこれまで来た印度洋である。ものすごく強い風で吹きとばされそうだが、昨年同様眺めは最高だった。

南アは1994年に獄中生活28年のマンデラさん（写真2がその監獄）が大統領となり、昨年第2回の選挙があった。各州を代表するNCOPと議員数400人の国民議会から成る2院制で、この国民議会は与党が今回の選挙で憲法改正もできる2/3の議席を獲得した。しかし350年も続いたアパルトヘイトの傷痕はあまりにも深く、とくに黒人の失業率が高いし、犯罪も激増している。義務教育は一応無償となっているが、実際は教科書も買えず、学校へ行けない子どもたちのなかにはストリートチルドレンも多い。多事多難の前途である。

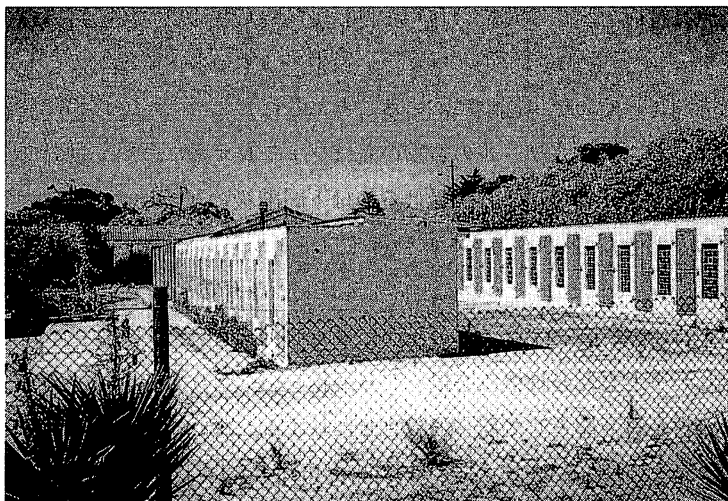


写真2 南ア・マンデラ前大統領が28年間収監されていた監獄

モンバサからケープタウンまではアフリカの NGO の活動家たちが乗船され、それぞれの国の抱える問題について話された。タンザニア、ケニア、ソマリア、ウガンダの4カ国である。女性の地位向上、内戦のための無政府状態、貧困や環境問題、子どもの問題など悩みはつきない。とくにアフリカの諸国に共通なのは最低重債務国が多いことで、これらの国への債務帳消しが世界的な NGO の運動となっている。せっかく乗ってもらったのだから、私はこうしたゲストの人たちに日本の問題、とくに沖縄問題について知ってもらおうと、持参していった英文のパンフのほか、私の沖縄関連資料と年表を英訳したものをお渡しして、彼らに説明する時間をつくってもらった。こうした世界各地の活動家たちとも交流できることは、ピースボートならではの収穫である。

4

ケープタウンを出て9日目にやっとリオデジャネイロ、さすがに大西洋

の船旅は長い。私はリオでは昨年お世話になったリオ日系協会の方のところへホームステイする予定だったが、船中でリオのストリートチルドレンの話聞き、その更生施設に泊まることにした。

世銀の調査ではブラジルの貧富の差はシェラレオネについて世界で2番目という。貧困の打撃を一番受けるのは下層階級の子どもたちで、17歳以下の子どもたち6000万人の半数は1日1ドル以下で暮らしているという。1ドルというのはミルク1リットルとパン1斤の値段である。サンパウロでは14歳から17歳の女の子がたったの15ドルで体を売っている。こうした子どもたちは盗みを働いたり、物乞いしたりするので、商店主たちは警官を殺し屋として雇って殺させたりする。だいたい前の数字だが、リオ州では88年から90年までの3年間に4611人のストリートチルドレンが殺されたという。

こうした子どもたちを収容して“愛のある生活”に戻そうというのが、私たちが泊ったサンマルティーニョ協会である。この協会の寮は市内に6つあり、私たちの寮には22人の子どもがいた。寮に着くと、歌と踊りで歓迎してくれ、食後は折り紙や歌、紙風船、シャボン玉、数字の遊びなどで交流した。私はここにベトナムの孤児院でもらったカレンダーとシンガポールやアフリカでみやげと思って買った絵葉書を贈呈したが、とくアフリカの象、キリン、縞馬、ペンギンなどの絵葉書は子どもたちに喜ばれた。帰国してから、アフリカで撮ったこれらの動物などの写真を、翌朝みんな撮った写真と一緒に人数分だけ送ってやった。それから、これはいつものことだが、ベトナムやタヒチ、チュークなどで撮った子どもの写真も宛名を書いてもらって帰国後送ってやった。以前北朝鮮やタイに行ったときもそうである。まったくわからない字だが、宛名をコピーして出せばちゃんと届く。私のささやかな“民際外交”である。

船に夕方戻ったら、リオ日系協会の人たちが20人ほど来ておられ、私が昨年ホームステイした前協会会長さんもいて、船の出発間際まで語りあった。私は持参した近著『76歳、山の楽しさと恐ろしさ——平和なればこ

そ——』を皆さんに差し上げたが、3世あたりになると日本語を読めない人もいるという。もっともな話である。前会長さんからは来年来たときはぜひうちにホームステイしてくれと“鬼が笑う”ような要請もあった。今のところ“鬼のお呼び”はなさそうなので、2001年のクルーズでは協会の皆さんに前にもふれたピースボート17年のスライドを見て頂く機会をつくってくれとお願いの手紙を出してある。

リオでは、「ピースボール」グループの主催で向こうの子どもたちとサッカー大会が行なわれた。これは日本じゅうの小学校などからサッカーのボールを集め、生徒たちの写真やメッセージを添えてボールを現地の子どもたちへ渡すもので、サッカーを通じて日本の子どもたちと世界の子どもたちの「出会い」、そしてその後の交流をつくろうという、いかにもピースボートらしい試みである。提供してくれた子どもたちにはどんな所へ持っていくのかという説明もし、帰国してからも報告をして、日本の子どもたちにも、世界の同年代の子どもたちがどんな状況にあるのかを知ってもらう。今回のクルーズでは、これまでにケニアのナイロビとモンバサ、マダガスカル、南アでサッカー交流を行なっている。

ケープタウンからここまでゲストとして乗船されたアンジェラさんは、ブラジルの先住民に関心を寄せている人で、スライドを交えながらのお話は当然のことを改めて気づかせてくれた。曰く、「西欧文明だけが唯一の文明ではない。」さまざまな文明・文化があるという当り前のことが案外忘れられている。もちろん、それは一切の西欧文明を排除しようというものではなく、ビデオやテレビ、医療などの西欧文明の所産も自分たちの固有の文化や伝統を維持し、存続させていく手段としてなら大いに活用しようというのである。

私は貨幣経済に追いつめられ、あくせくと生活に追われる現代社会を諷刺した小説『パパラギ』を思い出した。南の島に観光に行った白人が、椰子の木蔭で寝そべっている原住民に「怠けていないで働いたら」と声をかける。「何のため働くのだ」というその質問に、白人は「お金が稼げると、

私たちのような観光もできる」と答える。「何だ、おれたちは毎日“観光”しているのだ」こんな漫画もあった。

リオからは2人アルゼンチンの人がゲストとして乗船された。「5月広場の女たち」というグループの代表ラウラさんとジャーナリストの安里さんである。ラウラさんは夫君と3人の子どもたちがそのつれあいともども、計7人の身よりが軍政時代に不当逮捕され、今なお行方不明という方で、同様な遺族たちとこのグループを組織して、真相究明と責任の追及を続けてきた。毎週木曜日の午後3時から大統領官邸前の「5月広場」で無言のデモを続けている。私たちの船がヴェノスアイレスに着いたのがちょうど木曜日だったので、私たちも早速このグループの事務所を訪ねて遺族の方々と交流したあと、広場に行ってこのデモに参加した（写真3）。

3万人といわれる行方不明の人たちのなかには日系人が14人おり、日本国籍の人もいるので、日本大使館に訴え出ているが、まともに取り上げてくれない。ぜひ日本本国で外務省に申し出てくれという。私にとって大きなショックだったのは、とりわけ沖縄出身者が多いということである。



写真3 大統領官邸前の「5月広場」での無言のデモ

交流した人たちのなかに、苗字からしてすぐ沖縄出身とわかる山城さんと比嘉さんという方がおられた。一緒にデモリながら、山城さんに聞いたところ、1938年、15歳のときお兄さんとアルゼンチンにきたそうだ。戦前貧しさのためいとしい故郷を捨ててハワイ、アメリカ、南米に移民した日系人のなかにも、沖縄の人は際立って多かったという。中南米ではいちばん上に白人、次に混血、その下に原住民のインディオ、最下層に日本人や中国人の労働者という階級構造だった。そういう境遇に堪えてやってきたところに、家族の不当逮捕、行方不明である。そして沖縄に残った人たちはこれまた4人に1人が死んだあの戦争、さらに戦後半世紀を過ぎても今なお基地あるが故の苦しみの日々である。「去るも地獄残るも地獄」、まさか南米にまで「オキナワの悲劇」があるとは思ひも寄らなかった。そして山城さんが50何年ぶりに故郷に帰ったら、昔の山も川もすっかり変わってしまっていてわからなかったという言葉に、暗然としてうなずくよりほかなかった。

安里さんも名前の示す通り沖縄系で、アフリカ、ブラジル、アルゼンチン、チリ、タヒチといったところのほかの平和活動家たちと同様、私は沖縄問題について話をし、またピースボートがどういう経緯ではじめられ、この17年どんなところを回ってどんな体験をしたかというスライドを見て頂いた。

軍政下での不当逮捕、行方不明はお隣のチリでも同様である。1970年、アジェンデを大統領として世界最初の選挙による社会主義政権が出現したとき、アメリカのCIAの後押しでピノチェットがこれを顛覆させて軍政を布き、約3000人もの人たちが行方不明になった。遺族の人たちはAFDDという組織をつくり、命がけでその真相の究明を今日まで続けてきた。昨年のクルーズで私たちはこの人たちの集会に参加して5人の人たちから切々たる訴えを聞いた。私が代表して、船中でみんなが折った千羽鶴を手渡し、こうした人権蹂躪はチリやアルゼンチンだけではなく、平和でゆたかに見える日本でも実は同様なのだと話した。米軍の軍政下のとき、

米将校がメイドをレイプし、そのことを知った彼の妻がメイドに命じて庭に穴を掘らせ、ピストルで彼女を射殺してその穴に埋めた。事は知られたが、公けにされないまま、2人は帰国した。沖縄が本土に復帰した後も、これほど極端ではないが、レイプ、轢き逃げ、殺人などといった米兵による犯罪が少なくとも1日に1件は沖縄のどこかで起こっている。

マゼラン海峡を過ぎてチリ西岸を北上するあたりは氷河からの流水がブカプカ（写真4）、山々の頂きは雪で真白である。テンダーボートで氷河に接近し、拾い上げた氷で船上に帰ってからオンザロック、のんびりにはこたえられない。

このあたりで、オペレッタ歌手であり、ピアニストでもある森田留美さんの指導でミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」を上演した。オーストリーのフォン・トラップ元海軍大佐は妻を失ったあと、妻を思い出させるようなギターその他を7人の子どもたちの目に一切ふれないようにし、歌も禁止、大声をあげたり駆け廻ったりしないようにきびしく育てていた。そこへ修道院から家庭教師として派遣されてきたマリアは、歌を

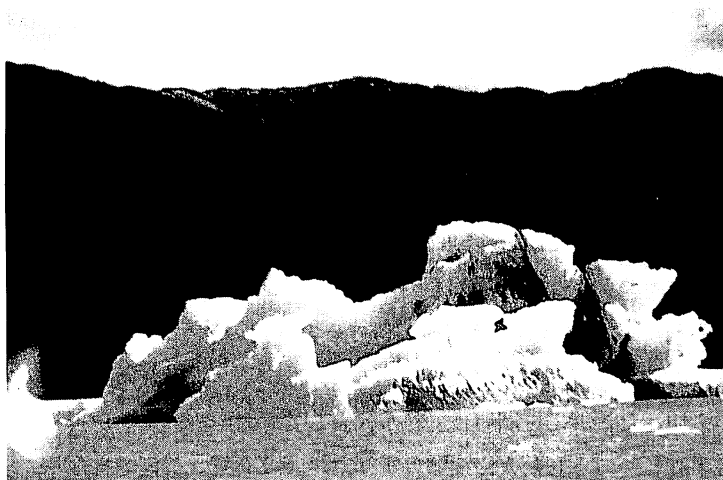


写真4 チリ西岸を北上するあたりで出会った氷河からの流水

通じて子どもたち、そして大佐にも明るさを取り戻させる。折からオーストリーはドイツに併合され、大佐は海軍に復帰してナチスに協力するよう命令されるが、これを拒否し、相思相愛となったマリアと結婚する。国境はすべて閉鎖されているので、子どもたちを連れてアルプスを越えて脱出するというストーリーである。実際あった話だという。私は大佐のはじめてのところだけの役となったが、何しろ劇というのは小学校以来、ずいぶん練習を重ねても本番でセリフをとちり、何とかごまかした。しかしいい思い出になった。

森田さんはこのミュージカルのほか、リサイタルでもみごとな歌声を聞かせてくれた。日本にいても、めったにない機会である。昨年は加藤登紀子さんが廈門からダナンまで乗船し、船中でもダナンでのチャリティ・コンサートでも、うっとりするような歌声、これがすべてタダ！

マゼラン海峡はいつもひどい荒天で、昔マゼランがここを過ぎて広々とした海に出たとき実におだやかな航海となったので、“Pacific Ocean”（「太平洋」）と名づけたと伝えられる。だが昨年同様、予想したような悪天はなかった。ただ一度ひどいピッチング（縦揺れ）、ローリング（横揺れ）があり、最前部で最上階の私の船室の窓に正面から何度も浪がザブーンとかかかってきたし、朝起きてみたら机の上の本や書類は皆床の上に散らばり、水差しは落っこちて割れていた。私がピースボート 17 年の船旅で体験した 2 番目の大きい揺れだったが、体質のせいか、船酔いは一切したことがない。

さて、イースター島といえばいうまでもなくモアイの群像である（写真 5）。この巨像を運ぶコロをつくるため島じゅうの木が切りつくされ、作物はとれなくなってしまって、一時 7000 人もいた島民は減少の一方となってしまう。自然を破壊している人類の未来を示唆しているかのようである。島を一巡し、きれいな海でしばらくぶりに泳いだ。

沖に停泊している船に帰るテンダーボートの中で、つぎに寄港するタヒチの女性平和活動家ロティ・マケさんに声をかけられた。96～97 年の世



写真5 イースター島のモアイの群像

界一周クルーズで日本に帰ったらちょうど浮上していた米軍用地特措法改悪に対し、このクルーズで知りあった世界各地の活動家に反対のアピールを求めたところ、真先に反応してくれた人である。95年に沖縄に行ったことがあるという。

今回が3度目のタヒチは近くのモルロア環礁でフランスの核実験が重ねられたこともあって、非常に反核の意識の強いところである。ここの反核団体ヒッティ・タウ（「今立ち上がる時」の意味）の代表ガブリエルさん、通称ガビさんは、93年に広島を訪れたことがあるそうだ。年がら年じゅうどこへ行ってもはだしという愛すべき人物で、フランスの援助なしに経済的に自立をする方策の一つとして、ココナッツオイルやバニラをつくっている。だが、核実験に島民が労働者として駆り出されたため、以前は生活物資の90%が自給できたのが今はわずか10%という。私たちは彼氏がポリネシア人、彼女がパリジャンヌという家にホームステイをしたが、食事はタロ芋にパン、パンの原料の小麦はニュージーランドから輸入という。経済的自立への道はきびしい。私は沖縄のことを思い出した。

つぎのフィジーは新婚旅行の天国とされているが、ここに第二次大戦中の日本軍による傷痕が残っているということはほとんど知られていない。ここからだいたい離れた島々の国キリバスにバナバ島（オーシャン島）と呼ばれる2キロ四方ほどの島がある。かつてはリン鉱石が豊かで、長く英国の植民地支配下にあり、戦争中は日本に占領された。両国の支配を通じて、先住民バナバ人は全員が故郷を追い出され、鉱石は掘り尽くされて、荒れはてた廃墟の島が残された。人びとの強制移住先がこのフィジーのランビ島だったのである。ここに暮らしているバナバ人たちは、島の環境回復の支援と、旧日本軍による財産略奪や虐殺への補償を日本政府に要求しているが、日本政府はサンフランシスコ平和条約ですべて解決済みとして、これを省みようとしない。ランビ島のお年寄りたちは戦争中私たちが歌った「月月火水木金金」とか、「兵隊さんのおかげです」といった歌をよく覚えている。

ところでフィジーといえば、平和問題については「南太平洋フォーラム」(South Pacific Forum, SPF)を逸するわけにはいかない。SPFは1971年、フィジーのイニシアティヴによりつくられ、現在フィジー、キリバス、ナウル、ソロモン諸島、トンガ、バヌアツ、西サモア、ツバル、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島、クック諸島、パラオ、ニウエ、パプアニューギニア、ニュージーランド、オーストラリアの16カ国から成る地域協力組織である。見られる通り、そのほとんどが、小さな島国であり、一つひとつとしては経済力も弱く、政治的な発言力もきわめて小さいが、お互に結合することでその存在意義を大ならしめようというものである。

事の始まりは70年のフランスの核実験だった。太平洋島嶼国のなかで最初に国連入りをしたフィジーをはじめとして、西サモア、クック諸島、ナウル、トンガに加え、オーストラリアとニュージーランドの7カ国は政治的なフォーラムのSPFを結成して、この核実験に対し共同の抗議声明を行ない、あとではハーグの国際司法裁判所に提訴までして、その存在を世界に知られるようになる。80年代になると、SPFは日本の核廃棄物の

海洋投棄に反対して、これを断念させるに至った。

90年代には、小さな島国にとっては致命的な地球の温暖化による海水位の上昇について、太平洋、カリブ海、印度洋、大西洋、地中海、南シナ海の43の島嶼国から成る「小島嶼国連合」(The Alliance of Small Islands States, AOSIS)のメンバーとして、リオデジャネイロや京都での国際的な環境会議で指導的な役割を果たしている。

SPFの活動はこうした平和問題に止まらない。ほとんどが第一次産業にしか依存できない経済的に弱小な島嶼国として、地球規模の経済の自由化に対処するための地域的協力も行なっている。詳細については、広島大学平和科学センター『広島平和科学』No.22所収のYOKO OGASHIWA “South Pacific Forum: Survival under External Pressure”を見て頂きたいが、今回のフィジー訪問の際は、SPFの最近の活動について聞いてみたいと思っている。

つぎのラバウルはあらためていうまでもなく、第2次大戦中南太平洋での日本軍の最大の基地があったところである。米軍の島づたいの飛び石作戦で、後方に置きざりになってしまったラバウルでは、食糧などの補給は絶望的となつたため、軍自らの手での耕作で自給体制に入らざるを得なかった。今村均軍司令官の“善政”もあり、ほかの占領地とちがって原住民たちとの関係はきわめて良好で、敗戦後の軍の復員の際、日本に帰らないで原住民の娘と結婚して残ってくれと言われて困った兵もいたという。昔の飛行場の近くのジャングルに残る爆撃機の残骸(写真6)に「つわものどもが夢の跡」を思わせられた。

最後の寄港地チュークに近くなると、マゼラン海峡あたりでは頭の真上に見えた南十字も、水平線すれずれとなる。長いと思われた3カ月の船旅も過ぎてしまうとあっという間、尽きぬ名残に「こころでシージャックをやって、船を戻させようじゃないか」などと物騒な話が出たりする。

長い船旅での楽しみの一つは毎日、4~5本上映される映画である。「ビザと美德」は、第2次大戦中、リトアニア領事代理だった杉原千^{ちうね}畝さんが

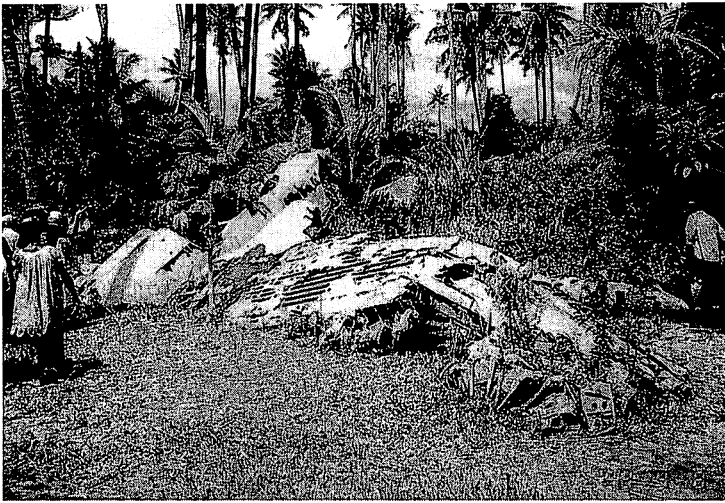


写真 6 ジャングルに残る爆撃機の残骸（ラバウル）

外務省の指示に反し、独断でビザを発給して約 6000 人のユダヤ人を救った記録映画で、昨年のアカデミー最優秀賞短編賞を受けた。半世紀を経た最近になって、ようやくこれまで冷たかった外務省は公式に河野洋平外相の謝罪、賛辞により杉原さんの“名誉回復”を行なっている。

このほか、「アルマゲドン」（宇宙人の地球攻撃を水爆で撃退、原水爆のみならずそれを生み出した戦争を正当化。いかにもアメリカらしい）、「タイタニック」、「スターウォーズ」、ベトナム戦争の三部作「プラトーン」、「7月4日に生まれて」、「天と地」、南アのアパルトヘイトとの闘いの「遠い夜明け」、懐しい「風と共に去りぬ」、「禁じられた遊び」、オードリー・ヘップバーンの「ローマの休日」、「カサブランカ」、「ガンジー」、「夜と霧」、日本映画としては「喜びも悲しみも幾歳月」、「学校（Ⅱ）」、「七人の侍」、「羅生門」などなど。

船上での私の講座は2回にわたる「スライドによるピースボート 17 年」（帰国後今年で 13 年目になる宮城学院女子大の大学祭への招聘その他多くの場で上映した）、「星の話——世界の神話・民話と南十字星——」、「点数・

序列のない学校づくり——マイナス×マイナスはなぜプラスになるか」,
「スライドで見る山行き 41 年」, 深田久弥の日本 100 名山のうち南アルプス, 奥秩父, 大菩薩のビデオ, 「友を特攻に送る日々——私の戦争体験」,
ビデオ「沖縄——未来を見つめ闘う島」, スライドを交えながら戦前については「オキナワの悲劇(1)——本土防衛の捨て石——」, 戦後については「オキナワの悲劇(2)——太平洋の要石——」, 「あの戦争は何だったのか」,
「南十字よさようなら」である。予定していた 2 回の環境問題と「大学は就職予備校か——ニセ学生の勧め——」は事務局の不手際で時間切れになってしまった。また軍産複合体の必然性についても 1 回予定していたのができなくなり, 戦争体験の講座のなかで要点だけを話さざるをえなくなったのは残念である。これについてはアソシエ編集委員会編『アソシエ I』(お茶の水書房発行)中の「ケインズ経済学から見た軍産複合体の必然性」を参照されたい。

3 カ月もの長旅, 本がふんだんに読める。船内の図書室には水先案内人たちの著書をはじめ, 岩波新書, 推理小説などワンセット取り揃えてある。私がくりかえし読んだのは“Greek Mythology”と“Tales of Greek Heroes”で, 私が知らなかったことも多く, 星の話の材料をかなり仕入れることができた。また中米 6 カ国(エルサルバドル, ホンジュラス, グアテマラ, コスタリカ, ニカラグア, パナマ)のガイドブックは, 単に観光案内的な内容だけでなく, それぞれの“History”がかなりくわしく述べてあり, とくにアメリカの横暴さが共通に目についた。

たとえばエルサルバドルでは, 永年続いた軍政に対し, 1980 年に結成された民族解放戦線(FMLN)は政府打倒の闘いを起こし, 全土を制圧する。アメリカは 80 年から 92 年まで 10 億ドル以上の援助によって政府にテコ入れし, 内戦は 10 年に及ぶことになった。ニカラグアでは独裁政権に対し, 1979 年左翼勢力 FSLN が革命を起こし政権を握るが, アメリカはホンジュラスを基地として反革命勢力コントラを支援し, これまた長い内戦となる。ハーグの国際司法裁判所はこうしたアメリカのニカラグア

への介入に“有罪”の判決を下した。エルサルバドルと同様、コスタリカのアリアス大統領の仲介により、88年にFSLNとコントラは停戦することになった。

どちらの国も、内戦が終わってから大統領選挙が行なわれたが、特徴的なのはエルサルバドルでは31.6対68.2、ニカラグアでは41対55と、革命勢力が少数票となったことである。これは人々が再びアメリカの干渉による内戦が起こらないような政権を望んだということであって、心底からのものではない。

国際法の根本である国家の主権をアメリカはどれだけ踏みにじってきたことか。目の敵のイラクには「イラクの解放法」までつくって、フセイン政権の顛覆を目ざしている。昨年の周辺事態法案の審議のさい、政府は「アメリカが違法な武力行使をするはずはない」といった。だが、ふりかえてみると、アメリカが気に入らない政権を直接間接の武力によって倒したり倒そうとしたり、あるいはミサイルを打ちこんだりした例は数限りない。ベトナム、キューバ、ドミニカ、グレナダ、パナマ、チリ、ニカラグア、グアテマラ、エルサルバドル、ハイチ、イラク、シリア、アフガニスタン、スーダン、ユーゴ等々。これが日本政府のいう“正義の味方”の実態である。

終わりに、ピースボートに対する新崎盛暉さんの批判に一言反論しておく。新崎さんは『アソシエ II』(2000.4)所収の「沖縄闘争の現場から・いま、言っておきたいこと」という論文のなかで、周辺事態法などがさしたる抵抗もなく成立していった背景の一つとして、一切の戦争・軍事力を否定する戦後平和運動を支えてきた価値観の崩壊があるとする。そしてその一例としてコソボ紛争についてのピースボート共同代表の吉岡達也の「沖縄タイムス」紙上の発言を持ち出す。「先の大戦に残虐行為をした末に空襲を受けた日本人の体験は、コソボ紛争でセルビア人が置かれた立場とよく似ている」……すると「人道介入」を掲げた北大西洋条約機構(NATO)軍のユーゴ空襲を認めるのか……「空襲には反対だ。広島、長崎の原爆や

東京大空襲を正当化できないのと同じだ」

これに対し新崎さんはいう、「ここには、アメリカを中心とする NATO の軍事行為やその結果に対する非難は一つもない。このピースボート共同代表の主張は、ミロシェビッチをヒトラーに見たてることによって、自らの軍事力行使を正当化しようとするヨーロッパの社民党、労働党、緑の党、旧共産党系列の政権の主張と同じである。ピースボートはウォーボートと改称したほうがいいのではあるまいか。」(傍点筆者)

吉岡は明確に「空爆には反対だ」と言っている。だが、それを引き出したのはセルビア側だということだ。アメリカを中心とする NATO への批判という点で吉岡の舌足らずはあるが、「ウォーボート」とはまったくの暴言というよりほかない。C.オーバービー、灰谷健次郎など前に挙げた人たちはすべて「ウォーボート」への協力者ということになるのだろうか。

沖縄行きもそうだが、ピースボートも毎回私につぎの闘いに備えての新たなエネルギーとファイトを注入してくれる。

闘いはここから、闘いは今から。

(2000. 11. 4)